

# バイクとカブキと南国時間、マニラにて

柏原千英

一年一度の割合でフィリピンへ出張するようになって、ほぼ一〇年が経つ。その間には二年のマニラ赴任も経験し、それなりに彼の地と人について一応理解したつもりでも、頭の中に疑問符が点灯したり思い返して納得や反省したりの繰返しだ。

例えば、いまだに勘どころを掴み難い交通事情。鉄道「網」のないマニラ首都圏では、移動手段は圧倒的に四輪車だ。時間帯に関係なく、路線バス、タクシー、ジブニー、家用車の蛇行が延々と続き、時々、書類やピザの配達バイクが隙間を縫っていく。運転手が頻繁に変更される一方通行の箇所には不案内だったり、スクールが降ればたちまち出来る渋滞の中から、訪問先や待合わせの相手と「トラフィック（渋滞）が…」と携帯でやり取りした回数は、両手足の指どころではない。となれば当然、彼らの通勤事情もかなりキビしい。「バスとジブニーを乗り継いで二時間は必要」、「自分の車だけど、早くて一時間強、平均では一時間半」等々、ニッポンの首都圏並みである。それでも皆が「仕方ないよね」と受け入れて鷹揚なのは、時間感覚が自分のものとは異なっており、この国の不変の気質なのだろうと思っていた。

ところが、状況は変わりつつあるらしい。

一昨年後半辺りから、中古を含めバイクを通勤用に割賦購入する個人が増え、二時間通勤していた知人は最近、職場近くに単身者のフラットを借りた。直接間接に理由を聞くと、もつと家族と過ごしたい、趣味や勉強に割ける時間を増やしたい…。共通するのは「通勤時間もつたない」なのだ。これぞタイム・マネジメント意識の誕生とフィリピン時間の終わりの始まりだろうか、などとおかしなことを考えていた時、イマドキ風に薄くヒゲを手入れた浅黒い肌の武蔵坊弁慶が頭に浮かんだ。

筆者がマニラ赴任中の二〇〇三年に、日本アセアン年文化交流事業のひとつとして、フィリピン大学デュラアン校国際研究センターによる歌舞伎公演があった。役者や黒子、お囃子と後見、舞台装置や衣装の裏方に至るまで、殆どを同校の学生が担当し、演目はかの有名な「勧進帳」と聞けば見逃すわけにはいかない。確かに、台詞には巻き舌が入り、三味線の調子合わせは少々甘かったが、弁慶と富樫は日本から借りたという本物の衣装を着て堂々と演じ、袴ではないが浴衣を着たお囃子の面々は、薄い毛氈の上でビシッと正座していた。タガログ語の逐語訳も映された一時間半の舞台は立派の一言、「微笑ましい」雰囲気

予想していた筆者は圧倒された。上演後のレセプションで学生を掴まえ、あれこれ質問してみると、センター所属で指導・監督を行った教授数名を除けば全員がカブキ初心者、台詞の翻訳から始めて、日本から招聘したプロによる約一週間の集中レッスンを途中にはさみ、公演初日までの準備期間は約八カ月だったという。筆者は大学時代に、勧進帳（長唄）を定期演奏会に出そうと一年近く稽古したのに：ダレだ、フィリピン時間だの、チームワークがちよつと苦手だのと勝手なイメージを持っていたのは！と反省したのだ、その時は。

さて、売上好調でバイクが増え続けると、渋滞状況の将来が気になる。いつか、四輪車とバイクが整然と流れる幹線道路を目撃する日は来るだろうか。まずは首都圏の交通行政を担うマニラ首都圏開発庁のお手並拝見のだが、理由にも方便にもなる便利な「トラフィック」の一言が使えなくなるのは少々寂しい、などとやはり勝手な思いを巡らせつつ、ある南国と向き合う日々である。

（かしわばら ちえ／アジア経済研究所開発研究センター）